

「スウェーデンは素晴らしい」といいつつ、従来通りの支援をするということ
文教大学 星野晴彦

「居場所・味方・誇り」というタイトルの意味を改めてかみしめました。そのうえで、ゆきさんが「寝たきり老人の理想的なケア」を探しに北欧に行った時の驚きがわかるような気がしました。

20年ほど前、スウェーデンに知的障害者福祉施設見学に行ったとき、あまりのショックで混乱してしまいました。当時、私は横浜市の知的障害者施設職員をしていました。そこにはプールもあり体育館もあり、農地も多くあり、職員も多くいました。運転手も常勤で控えており、一日数回の運行のために2人が雇われていました。しかし、4人部屋で畳8畳分の空間での利用者は生活。プライバシーはありません。外から鍵がかかるようになっていました。利用者は職員を「先生」と呼んでいました。組合の強いところで、調理も自分の労働条件の確保を第一として、食事の工夫などに気が回りませんでした。

そんな時にスウェーデンに行ったとき、グループホームの職員たちは「自己決定」ということをしばしば口にしていました。グループホームは、駅の近くにあるのです。今でも横浜市の施設は大きな変化もなく存在しています。本当に見るものがすべて信じられませんでした。しかし悲しいことに、私は日本に戻ると同じ施設職員として従来と同じことをしていました。

ゆきさんの講義で「度胸と想像力」とありました。「スウェーデンは素晴らしい」といいつつも、従来通りの支援をする人が日本には多くいるような気がします。度胸と想像力が十分ではないのかもしれないかもしれません。

日本ではいまだに津久井やまゆり園のようなところが存在しています。同時に施設内の虐待も起きています。

国や法律が違うからというのではなく、前線の支援者たちがプライドを持って、利用者のために持続して支援できることが必要だと思います。当時、スウェーデンの職員に、横浜の施設職員が「自分たちが、具合が悪くなった時に休めますか」と聞きました。スウェーデンの職員は「当然です」と答えました。日本の職員はぎりぎり働いて、そしてイメージを悪くしている部分があると思います。誇りのある居場所ができるような支援者の心が持続可能であるようにしなければならぬのだと思います。ともすると制度のことばかり言われ、前線の支援者の心についてのケアはおざなりになります。

長々と述べましたが、「寝たきり老人」という概念のない北欧でのゆきさんの驚きは、すごいパンチだったろうとお察しします。

改めてわが身を顧みて深く感銘して聞かせて頂きました。この驚きのようなものが大切なのだと思いました。